

# 丁玲『ソフィ女士の日記』に関する考察 ——女性的エクリチュールによる知識人女性の主体性分析——

高 媛

## 1. はじめに

中国文学史上、丁玲（1904－1986）は「女性的エクリチュール<sup>1</sup>の第一人者」としてその名に恥じない<sup>2</sup>。彼女の初期の作品とりわけ代表作である『ソフィ女士の日記』<sup>3</sup>は「女性性」<sup>4</sup>を意識的に表現しようとしたため、注目された。「中国文学史上において、丁玲の『ソフィ女士の日記』ほど多くの賞賛を浴び、また多くの非難を浴びた作品はない」<sup>5</sup>と言われるように同作が賛否両論を呼んだのも、この小説に体现されていた「女性性」のためであろう。丁玲の初期の作品に比べ、後期の作品は「革命禁欲主義」という主流のジャンルに迎合し、「女性性」を強く主張することなく、更に言えば「女性性」を隠すように工夫を凝らした文体で書かれている<sup>6</sup>。それら後期の作品が文壇から一定した支持を得ているのとは対照的に、初期の作品に対する評価は時代によって大きく異なる。

ここで『ソフィ女士の日記』批評史を簡単におさえておきたい。発表当時の中国では、革命文学の文学主流において、文化の中でも「個性」にかかわって「集団主義」が尊重されるようになった。この作品は大胆かつ繊細な女性心理描写により、自我にめざめた女性の反封建意識を描いたとして高く評価され<sup>7</sup>、かつ強烈な「個性」と強い意志をもつソフィというヒロインは、当時の文壇にも衝撃を与えた。「集団主義」を重んじる当時の時勢と全く相容れないようでありながら、ソフィという女性像は「魂に時代の苦悶の傷を負う若い女性の叫び」<sup>8</sup>として高く評価された。しかしながら、1950年代末にその評価は一転し、退廃的で不道德な心理を描いた「毒」として同作は批判的となり、丁玲は一度筆を断った<sup>9</sup>。1980年代以降になって漸く丁玲作品は再評価され、丁玲の名誉も回復された。特にフェミニズム批評により、ソフィを代表とする丁玲の初期作品の女性登場人物は、「近代中国における女性意識の最

も鋭い表現の一例」<sup>10</sup>として賞賛された。丁玲は中国現代小説史において初めて女性の意識から創作を試みた女性作家と見なされ、20世紀中国におけるフェミニズム文学の先駆者と呼ばれるようになった<sup>11</sup>。

このように丁玲の代表作のヒロイン、ソフィが中国文学史において評価されるとき—1920年代当時の文学批評においても、また1980年代以降のフェミニズム批評においても—彼女は意志をもつ女性として、また性の抑圧から解放されようとする女性を代表する者であるかのように扱われる。いずれにせよ、ソフィは自分の意志をもつ「主体」（後述）として立ち現れていると言えよう。しかし、『ソフィ女士の日記』が書かれ、またその舞台となった1920年代中国において、ソフィの「覚醒」は広く「女性」に体験されていたものだったのだろうか。

彼女が「女性」であるだけでなく、「知識人女性」であることには重要な意味があったと考えられる。本稿で注目したいのは、ソフィというヒロインが知識人階級に属する女性だったということである。興味深いことに、1920年代中国においては西洋から新たなセクシュアリティの理論や性道徳が取り込まれ、その影響のもとで女性知識人たちが自由の権利を主張するという動きがあった。本稿では『ソフィ女士の日記』において自身の性的欲望に目覚め苦悶するソフィというヒロイン像を、この1920年代という時代背景との関連から読み解きたい。本稿では特に1920年代当時の知識人女性たちを取り巻いていたセクシュアリティの観念<sup>12</sup>が、ソフィというヒロインの描写と密接にかかわっているという仮定のもとで、小説『ソフィ女士の日記』の新たな解釈を試みる。

## 2. 主体性及び女性的エクリチュールについて

本稿では、小説におけるヒロインの描写を通して表現されている「女性の主体性」について検討を試みる。ここでは「主体」という概念を、「思考し行動する人間」<sup>13</sup>という意味で扱っていく。

ラカンの精神分析理論は、他者（OTHER）という存在を、主体ではないすべての人だけでなく、主体が持っていないすべてのものを指す究極のシニフィアン（言語記号）<sup>14</sup>として定義している。シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』は、「家父長制の下で男性は主体であり、絶対者である。つまり女性は他者なのだ」<sup>15</sup>と述べる。また、「女性なるものを他者として打ち立て

るディスクールを通して、男性は新しい社会権力のネットワークを展開し、自身を主体的な存在として築くことができている」<sup>16</sup>のだ。したがって、家父長制においては、男性に関連する属性が評価され、「女性的」とされるものは貶められる。そのため、女性は男性社会からの「疎まれ者」<sup>17</sup>となる。女性はこの男性社会から「疎外」されている存在だと言えるだろう。男性の主体性は、女性との関係において男性がみずからを優位に位置づけることで成立している。

現代文学は「人々の生活の実態や精神状態を反映」し、「知識人男性たちが支配する重要な場所になっている」<sup>18</sup>と言われる。そのような文学界で女性が「排除されている」現状を捉え、ウルフは「女性という性別を意識し、女性としてもものを書く」<sup>19</sup>と主張している。つまり、女性たち自身が本当の歴史を語り、自身のイメージ、精神世界、心理などを表現していくためには、他人である男性たちを頼りにしてはならないのだという。そのため、女性たち自身が自分たちの方法で書いていくことが求められるのだ。その女性的なエクリチュールを創出するためにはまず第一に、「自分を書くことで、自分の肉体に戻る」<sup>20</sup>ことが必要だとシクスーが述べている。それは「男根が支配する言説」が女性に指定する「沈黙」に対し、「女性が女性に向けて書くこと」によって挑戦することである<sup>21</sup>。また、「身体（肉体）を書くこと」は、「身体に戻り、身体を独立した存在として自由に声を出させる」<sup>22</sup>ことである。また、欲望を語り、思い出、寝言などを通して女性たちが自身の思いを述べていくことも、その「身体を書く」行為に属する<sup>23</sup>。

また、シクスー<sup>24</sup>が主張する通り、従来 of 文学史においては女性の視点が欠如し、女性の存在が十分に表現されていなかった。いわゆる、男性中心的な文化において、女性は特にセクシュアリティに関して、女性自身が本来求めているような観念を植えつけられる。したがって、この男権主義のしがらみから女性が自身の意識を解放するためには、「一番奪われていることに戻り、いわゆる自分自身に戻る」<sup>25</sup>必要があるとシクスーは主張している。そこでシクスーは、「自分の身体から自分の筆または自分のディスクールを通して、身体の器官を語り論じ、身体が本当に求めていることを書く」<sup>26</sup>こと、すなわち女性的エクリチュールを提唱するのである。

他方、男性の価値基準のもとで批評において「女性の文学が劣っている」<sup>27</sup>というレッテルを貼られたりする。そのため、女性のディスクールは長い間

力を奪われ、沈黙を強いられてきた。しかし日記はその間、手紙と同様、女性に書くことが許されていた文章であり、他の表現手段を奪われた女性の創作力の避難所であった。

この点から考えるならば、女性と日記の間には切っても切れない関連性があり、日記を書くことは女性の主体性を追究する一つの道だと考えられるだろう。日記は、女性的エクリチュールでありながら、女性のディスクールでもある。本稿では、女性が書く日記において、この女性の主体性がどのように形成され得るかという点について述べたい。

### 3. 日記に記された女性の性的欲望の自覚

本節では、小説の中でソフィの性的欲望が、彼女の日記の文章を通して語られていた点に向ける。興味深いことに、ソフィが自身の肉体的快感に敏感になり、その感覚を明らかにするのは、彼女の日記の中である。女性のエクリチュールである日記、そしてそこに秘められた力の可能性に注目したい。

西洋思想において、情欲と理性は長い間対立した概念として考えられてきた<sup>28</sup>。また、情欲（欲望）は、理性に従属するものとして考えられてきた。そのため、性欲は動物的な本能と見なされ、性欲に耽るような人は非理性的で意思が薄弱であると軽んじられる傾向にあった。性欲や、それに伴うものとされる性的快感は人間たちの理性の世界を脅かすものだと考えられていたのだ<sup>29</sup>。中国でも性に関して同様の思想が根づいており、「女性が性愛について語り、関心を持つようなことは中国の父権制のなかで何千年も禁止され、抑圧の対象となってきた」<sup>30</sup>。女性たちが性について語ろうとすればそれははしたないことと見なされ、禁止と抑圧に置かれる。

その一方、1920年代には性に関する様々な理論<sup>31</sup>が導入された。更に「新しい性道徳」<sup>32</sup>について活発な議論を呼んだ。そのときにもたらされた現代的な性観念は、自身の身体や欲望に対して一部の人々を覚醒させたと言えよう。また、当時、特に知識人女性たちは前向きな姿勢で新理論を受け入れようとしていた<sup>33</sup>。何千年も眠っていた女性の性的欲望が知識人女性の間呼び覚まされたと解釈することもできよう。自身の性的欲望を女性が認めることは、『ソフィ女士の日記』の中では、ソフィという知識人女性の行動として表現されている。ソフィは美男子である凌吉士に対して露骨な性的欲望を大胆にも口にした。

ソフィのこの大胆さは中国数千年の性に関する禁忌を犯す。のちに批評家からソフィが「性的欲求不満」というレッテルを貼られ、「男の体つきをフェティッシュ化する」<sup>34</sup>、「性的な嗜みに従おうとして、ソフィは自分の欲望に逆らっている」<sup>35</sup>といった強い非難を受けているのも、そのためであろう。これらの非難は、女性の心理に対して規制を課し、理解しようとしなない男性中心主義的な考え方からきているのではないだろうか。女性が性的欲望を持つと認めることで、欲望を支配する者としての自身の立場が覆えされることを、男性は恐れているのだと言えよう。

では、男性中心主義的な社会において、欲望の主体<sup>36</sup>として想定される男性の位置づけをいかにして転覆させることができるだろうか。一方、欲望の客体<sup>37</sup>として位置づけられる女性はいかにして、主導的な役割を果たし得るだろうか。これらについて、作品に即して考察を深めたい。

まず、1920年代は中国において、二つの意味で女性が「発見」<sup>38</sup>された時期であった<sup>39</sup>。第一に、女性はこの時期ようやく人権を与えられ、人と見なされるようになった。つまり、「女は男と同等の人間である」<sup>40</sup>と考えられるようになったのである。第二に、女性が自身の肉体に、とりわけ性的欲望に覚醒した<sup>41</sup>。その自らの身体における女性の覚醒を、作品の中でソフィは体験している。ある日、長身で白面、優雅な物腰の男の凌吉士がソフィの目の前に現れ、彼女を魅了するのだ。彼に「男性の高貴な美」の魅力を強く感じた彼女は心を奪われ、「子供が飴を求めるような気持ち」（50頁）で彼を見つめる。そこで彼女は「大胆に彼を隈なく観察し、更にそのあらゆるところに私の唇をあてたい」（53頁）と思うようになる。このように、ソフィは彼に性的欲望を抱き、自分の意識を日記の中で赤裸々に述べている。その日記での記述はときに、次に挙げる引用のように大胆な表現や、強い訴えという形をとる。

彼が一人で私の前にいる時、あの顔つきを見、あの音楽のような声を聴くと、私の心はあの感情の鞭をじっと受ける。なぜ積極的に彼の唇に、彼の眉、彼の[中略]どこでもいいから、口づけしないのか。ほんとうに、言葉が口の端まで出て来ていることがあるのに。「私の王、接吻させておくれ！」（73頁）

この日記において、いたるところに「接吻」したいというソフィの欲望は、彼を見つめる彼女の「まなざし」<sup>42</sup>を通じて書かれる。彼女は視覚的に、男性

の美しさを快く享受している。そうすることによって彼女は封建的儀礼と道徳の束縛から抜け出すことができるのだ。この時の彼女は、「性的欲望の上で、受動的であり、男性によって目を覚まされるのを待つ伝統的な女性像」<sup>43</sup>とは対照的である。

ソフィはこのとき性的欲望を赤裸々に綴ることによって、自分自身にその欲望があることを認識し、また自分の側から能動的に欲求を述べている。それに、性に関して厳しく要求されている中国人女性は従来から自分の欲望を直視する勇気がないと長い間考えられてきた<sup>44</sup>。そのような観念が当然とされているからこそ、男性の身体に性的欲望を抱き、更にその快楽を享受しようとしていることを堂々と述べるソフィの言葉は非常に大胆で、勇敢に見える。またソフィが日記のなかで、性的衝動を覚え、性的幻想を抱き、及び性について思いを述べるという行為は、主体として自分の欲望を直視し、肯定していると言える。すなわち、彼女は女性として肉体の覚醒を経験し、自身が女性として欲望を持つことを肯定しているのだ。

#### 4. 日記に記された女性の疎外<sup>45</sup>

##### 4.1 新しい性道徳と古い性道徳との葛藤

本節では、当時の中国知識人層における新しい性道徳の導入を背景に、ヒロインによって体現された主体性、そして彼女が経験する葛藤と性的欲望との関わりを分析する。

作品の中では、凌吉士と出会うことで、ソフィは「男性の美」を知り、衝撃を受ける。彼女は彼に誘惑を感じ、「彼を慕っている、彼を想っている」(78頁)と自覚するようになる。この過程において、それまで「人」としての感覚を知らなかったこの女性の身体は、性的欲望に目覚めるのだ。人としての根本的な欲望が呼び覚まされることで、「彼の愛撫が得られるならば、その手が私のどの部分に触れようと、それによって、あらゆるものを犠牲にしてもかまわない」(同前)と彼女はその欲望と快楽に耽ることになる。

性に関する知識が導入され始めた1920年代において、知識人女性にとっては、この欲望は捉えがたく<sup>46</sup>、しかし重要な意味を持つものであった。当時の知識人女性たちは自身の中に欲望を認め、自分が別人のようであるという感覚を覚えた。性的欲望を自覚したとき、彼女たちは熟知しているはずの自己イメージの中に、理解し難い一面を見出す。そして彼女たちが意識し始めた

欲望は制御できそうに思える一方で、コントロールしがたいものであった。ソフィの場合、彼女は凌吉士に対して強い性的欲望を感じ、親友に嘘をついても凌吉士の住まいの近くに引っ越そうとする。そして彼女は、「彼の唇が[自分の唇に]ぴったり合わされる日がくれば、自分の身体が狂笑のあまり、ばらばらにくだけても本望」（同前）という気持ちのもと、一日に何回も彼に会いに行く。この時、彼女は「理性」<sup>47</sup>の束縛から抜け出そうとしていると言えるだろう。彼女は美男子の凌吉士に自分が性的欲望を抱いていることを自覚し、そのことによって快楽を享受しようとしている。

1920年代に発展しつつあった新しい性道徳の理論は、女性たちの新たな道徳観の土台となり、彼女たちを混乱から救う可能性を持っていた。しかしこのときのソフィには、この性的欲望の覚醒によってもたらされた衝撃があまりにも大きすぎ、それを受け取る心の準備がまだできていない。「自ら性的欲望をコントロールするのは、理性の世界に到達するための一種の手段だ」<sup>48</sup>と言われるように、「理性」は、性的欲望を抑圧するようにも働く。そして、男権社会に取り込まれた女性たちは、「理性」を要求され、束縛される傾向にある。また、広く社会において、長い間「理性」に関する諸概念は、男性的な権益と結びつくものであった。女性は「理性」によって自己を管理し、男たちにとって理想的な女性となるよう要求されている。ソフィは知識人女性であるが、彼女のセクシュアリティには、古い性道徳の象徴とされる理性が終始存在している。この理性は道徳的に、また理知的に彼女に説教をする。ソフィは自身の理性について、次のような考えを述べている。

この社会では他人には何の損害を与えないことであっても、自分の欲しいものを自由に取って来て自分の衝動、欲望を満足させることは許されないのだということを承知している。(50頁)

これは、女性が男権的な歴史文化に対してどうすることもできないという、彼女の「理性的な」認識であろう。中国の女性が束縛され、従属的な役割から抜け出せない原因の一つに「教育を受けていない」<sup>49</sup>ことがある。しかし、ソフィは十分な教育を受けた知識人女性であっても、何千年の間父権的文化の中で教え込まれてきた理性から完全には解放されていない。今も彼女の心にはびこるこの「理性」は、古い性道徳を引き継ぐものとして存在している。つまりそれは「覚醒したばかりの女性が図らずに男権的な「理性」の落

とし穴にはまり、知らないうちに男権の権益の共謀者になってしまう」<sup>50</sup>というような、男性のディスクールに女性を絡め取る、一つの罫だと言える。特に、理性の束縛を抜け出し、性的欲望を肯定しようとする時、ソフィはますます困惑を感じ、どうしたらよいか分からなくなる。彼女ははじめこのような性的欲望に支配されることを恐れ、快樂に耽るのは「真面目な女のすることではない」(53頁)と「理性」のもとで自己批判をしている。

このとき、ソフィの中では葛藤が起こっている。つまり、彼女の主体はこのとき二つの「自我」<sup>51</sup>に分裂する。その自我の一つは、性的欲望に覚醒する自我である。そしてもう一つは、それを理性という名の古い性道徳によって批判し戒める「理性的な」自我である。「人類史上の認識において、欲望と理性との葛藤は最もありふれた矛盾」<sup>52</sup>と言われるように、この二つの自我はことごとく対立し、互いに妥協しようとしなない。ソフィもまたこの二つの自我の間で葛藤し、いずれかを選ぶことも、いずれかに妥協することもできず、苦しい状況に追い込まれる。これら二つの自我の間で、ソフィは疎外を感じる。彼女は自分が欲望に耽るさまに茫然とし、「凌吉士は単に騎士のような風采だけで私をこんなにまで墮落させるのであろうか」(80頁)と戸惑いを感じている。そうしているうちに彼女は欲望を抑え込み、凌吉士に「もうしばらく居てくれるようにたのまなかった」(69頁)ことを後になって悔やんでは、「胸がせまって泣けて」(同前)もくる。また、この欲望をもっと抑えなければならぬと思っていたため、彼女は彼に手を握られたときも、厳しく固いそぶりを示す。しかし、そのすぐ後には「ちょっと目配せして拒絶にあう心配のないことを知らしてやりさえしたならば、彼はもっと大胆なことをやってのけたであろう」(57頁)と、彼とさらに接触する機会を逃したことを後悔し始める。

性的欲望にしだいにのめり込んでいく一方で、彼女は自分のそうした一面が「他人に知られたら、理知的な顔が突き出る」(72頁)と懸念する。そうすると今度は、「他人の崇めている道徳に支配されてほんとうに罪を犯しているような苦痛を感じさせられるのがいや」(同前)だとして彼女の中のもう一つの自我が、理性に反抗する。この混乱した状況から脱出しようと、彼女は「色欲の誘惑によって墮落しに行く」(74頁)自分を止めようと決断する。しかし、いくら自制しようとしても、やはり彼に会うとソフィは心が躍る。彼が目の前にいる間、彼女の眼には「彼はまるで物語の中の恋人のように映」り、「は



ッはッ！ソフィに恋人がいるのだ！」(76頁)と有頂天になってしまう。しかしその後は、「単にあの男の柔らかい髪や、赤い唇のために」(71頁)と、欲望に駆られた自分をさらに厳しく責める。性的欲望に駆られるままでは、自分が「ますます悪い方に追いやられる」(53頁)ということを知っている。それにもかかわらず、彼を手に入れたらという思いを完全に抑えることはできない。

ついに望みどおり凌吉士から接吻されたとき、ソフィはもう十分と言えるほど葛藤の苦しみを味わっている。それゆえに彼女は、「もし、あの時いますこし自制力があつたら、彼の美貌以外のものに気づいて石ころのように外へ放り出したのに」(79頁)と、自分からすすんで苦悶に入り込んでいったことを悔やむ。

このように葛藤に苦しみ、疎外感に陥るソフィの描写から、次のようなことが指摘できる。男性がするように性的欲望を持ち、それを堂々と行動で示していくことを彼女にためらわせているのは、知識人女性特有のプライドなのである。また、ソフィの疎外の根本的な原因は、彼女のセクシュアリティに存在している新しい性道徳と古い性道徳との葛藤でもあり得ると言える<sup>53</sup>。

さらに、ソフィが自身の性的欲望やそれに対する自制など、葛藤する思いを述べている場が日記であるということに注目しよう。「日記をつける人たちには、自我の分裂が頻繁に、広く確認されている。そうした自我の分裂の最も基本的であきらかな形態は、エクリチュールという事実そのものに由来する」<sup>54</sup>と言われる。彼女は葛藤の末、結局自身を「本当に、自分の死よりもたえがたい」(71頁)性の苦悶に陥れてしまう。ソフィが「性の苦悶」に陥る根本的な原因は、自分の中にある新しい性道徳と古い性道徳の間で、あるいは自身の性的欲望と男権的な社会に縛られた理性の間で葛藤が生じることにあり得ると言えるのではないか。

#### 4.2 肉体と精神との葛藤

ソフィが凌吉士に対して性的欲望を持ち、それを快楽として感じていることは明らかである。それと同時に、彼女はまた自分が性的な欲望の大きな力に突き動かされていることも実感していた。女が人を愛するときには、まず精神から始めるという恋愛パターンに慣れたソフィは、はじめから肉体に向かうというこの欲望が「愛」なのかどうか、見当がつかない。はじめ、彼女

は「これが愛であろうか。愛すればこそ、このような魔力がそなわるのかも知れぬ」(66頁)と思う。

一方で、そんなある時、ソフィは凌吉士との会話の中で、彼の内面にある卑しさを感じ取る。

彼は何を求めているのか。金だ、客間で商売上の友人と応待のできる若夫人ときれいな服を着せた太った子供たちだ。彼の愛情とは、何であろうか。金を持って妓楼へ上がり大尽遊びをしてひたる一時的な肉欲的享樂であり、ふんわりしたソファに腰をおとしてかぐわしい肉体を抱く。[筆者略、以下同様]…彼にとっては、父親がありあまるほど金をくれないという不満以外は、すべて一晩中夢も見ずに寝られることばかりだ。もし不満があるとすれば、北京には美しい娘がすくなく……(65頁)

上の引用について、一部の先行研究では、「ソフィは凌吉士の美形の下に卑しい魂が隠れていたことを知って、すこしもためらわずに彼を捨て、堂々と立ち去った。更に彼女には、伝統的な女性の弱さや、従属などの礼教意識の束縛が少しも見られない」<sup>55</sup>と評価されている。しかし、「ソフィが少しもためらわずに彼を捨て」去っているかという点では、本稿は異なる見解をもつ。

実際に、先の引用部分の前後でソフィは、彼の中には女性をただの捕虜や物として扱うような卑劣な魂が隠れていることを知る。その後、「ああ、哀れな人！彼はまだ知らないのだ。彼の面前のこの女がどんな軽蔑をもって自分の動作や話しぶりをあわれんでいるかを」(79頁)と彼のことを軽蔑し、罵倒、嘲笑している。しかし、それにもかかわらず、ソフィは自分が彼に対して持つ性的欲望を断ち切ることができない。このとき、肉体の欲望と崇高な精神性が激しくせめぎ合い、彼女の心の中では再び疎外が行われていると思われる。それがどのような点に見られるのかを、以下に論証したい。

美しい彼の中に卑劣な魂が隠れていると知ったとき、彼からの「あの自分の髪の毛の生え際にふれたキス」(66頁)を思い出し、後悔してソフィは泣きたくなる。このときの彼女の気持ちは、次のように述べられている。

なおわけもなく彼の親密な態度を受けてきた。この親密さはいうまでもなく彼が妓楼でふりまいた金の半分にも値しないものだ。自分を彼に捧げて、思う存分弄ばせ、娼婦と同じ取扱わせていたのではなかろうか。私がひとみの中に厳しい拒絶をこめさえしたら、彼もあんな大胆な真似

はできなかつたと思うからだ。[中略]私はどれほど自分を呪ったらいいのか。(同前)

これほどまでにソフィは後悔し、死を考えるほどの失望に陥る。彼女は自分が墮落に甘んじたために招いた事態を痛感することになる。この肉体上の欲望に覚醒した女性は、心身の一致した愛を努力して求めても、結局は失望するだけである。

この時、ソフィは「彼を独占したい」(54頁)という性的欲望は自分が追求しているような心身一致に基づく真実の愛ではないとして、自分の欲望の本質を見極めようとする。そのため、「こうした無意識的な誘惑のためにすっかり南洋人凌吉士のことに夢中になることは」(65頁)できないと自分に言い聞かせる。さらに彼女は「一度だって自分であるノッポさん凌吉士のことを愛していると認めたことはない」(同前)と言い切ろうとする。それにもかかわらず、彼女は自分の彼への気持ちについて、また愛とは何かということについて「どうしてもまだ一部分析できないところがある」という(同前)。彼女は自分の気持ちを不思議に思い、「これが愛であろうか。愛すればこそ、このような魔力がそなわるのかも知れぬ」(同前)と何度も自分の気持ちを確認しようとする。その答えはなかなか見つからず、「女がそうはしたなくては良い結果を得られない」(52頁)と、彼女は自分を責めてばかりいる。

また、凌吉士は自己中心的な人物であるため、ソフィの失望に全く気づかない。その後も、彼がソフィに「あの彼にとっては興味津津たる卑しい享楽や、「金儲けと散財」の人生の意義について語る言葉」(69頁)を聞かせるようすが綴られている。その中で、彼は「女性の本分についての高説」(同前)を教え説くかのようにソフィに語りかけている。この男が言う「女性の本分」とは、彼の機嫌を取れという女性に対する要求なのだ。それを知ったソフィは彼の男性中心的な考えを軽蔑し、「なぜこんなに自分の憐れな欠点をさらけ出す必要があるの」(80頁)と感じる。この知識人女性のプライドは、男女の恋愛関係において、男に主導権を握られ、自分が一方的に従属させられることも許そうとしない。

しかしそれにもかかわらず、肉体の上では彼をまだ求めているために、彼女は深い葛藤に苦しむ。「自分がバカにしている男」(同前)から接吻され、「愛さず嘲笑している男」(同前)に抱擁されながら、彼女の中では自己嫌悪の念

が「あらゆる力を奮って自分の心を痛撃した」という。(同前)そして、「急に悲しみがこみ上げてきて、彼を力一杯おしのけて泣いた」。(79頁)しかし、彼はこのソフィの涙など気にもとめていない。「自分の唇が温かさ柔らかさをソフィに与えた、彼女の心をくらすほど酔わせてしまったと思ったらしく、またもにじりよって、つづいてどんなに彼が私を思っているか」(80頁)を言い聞かせ、「ソフィ、僕を信じてくれ、僕は君をだましはしない」(79頁)とむずがゆくならないいわゆる愛の告白をつぶやきだす」(同前)彼のようすを、ソフィは冷淡な目でとらえている。

確かに、その告白は自分の「心をゆさぶった」(78頁)とソフィは認めている。にもかかわらず、「しだいに情欲に燃える彼の眼」(同前)を見て、彼女は脅える。このとき、彼の「愛の告白」が、男性の性的欲望の表明でしかないことを、彼女は見抜くのである。それと同時に、彼女の心の中で始まるのは「肉体と魂、または感情と理性との戦争」<sup>56</sup>である。彼女は性的欲望だけでは「本当の愛」が成り立たないと感じるのだ。ソフィはいまや「彼は本当の愛情を知らないのだ。真に一人の女性の愛を受けたことがあっただろうか。一人の女を愛したことがあっただろうか。いや、ない！」(71頁)と断言し、彼に向ける性的欲望から愛情の幸せが得られないことは明らかだ<sup>57</sup>と自分に言い聞かせる。

彼女が許せなかったのは、彼が自分の情欲を満たすために「愛」の名をかたっていることである。「もし彼が肉欲の満足だけを訴えてきたなら、その眼の色で私の心を捕らえることができたであろう」(79頁)とソフィは考える。彼の内にある卑劣な思想を知った今、彼の誓いの言葉すらも彼女にとっては醜いものを感じられる。改めて自尊心が奮い起こされた彼女は、次のように述べている。

もしこの一連の浅薄きわまる口説をほかの女に向かっていったら、必ず聴く者を動かし、いわゆる愛の心を獲得できたであろう。だが、私の場合その言葉は私を彼から遠く推し隔てたのだ。ああ、可哀そうな人、神はこんな美貌をあなたに与えておきながら、しかもひそかにあなたを愚弄するために、全く不相応な魂を貴方の人生の頂上においている。(78頁)

そのとき、彼が一度も女性を主体として、特に欲望の主体として見たことは

ないのだとソフィはわかった。このソフィの言葉には、男権的な意識に対する失望がはっきりと読み取れる。「あの情欲の火の巣穴——あの二つのぎらぎらした正に卑しい浅薄な要求以外何物も知らないことをまざまざと示している」(79頁)彼の眼から、ソフィは最終的に彼の企みを見抜くことになる。そしてまた、彼の「容姿の奥にかくされている魂のあの卑劣さ」(78頁)を知り、ソフィは彼を愛すまいと心にかたく誓うのだ。

ソフィは自身の性的欲望に覚醒するが、結局のところ、その性的欲望によって信念をくじかれる。そればかりか、この男性への執念はどこまでも彼女についてまわる。その後も彼女は「寝るときは、あの男のことを何とも思わないが、夢からさめて眼をこすると、またあの俗物のことを思う。彼は今日来るだろうか。いつだろうか。朝かしら、午後かしら、夜かしら」(67頁)という思いを、正直に書いている。彼の魅力に傾倒する一方、自分の性的欲望をコントロールできないようでは自分の信念を失ってしまうと、ソフィは認識している。しかしそれにもかかわらず、彼の魅力に抗うことのできない矛盾した自分を「今ではすっかりだめになった」(77頁)とため息をついて嘆くしかない。またこの「色欲の誘惑によって墮落しに行く自己」を救おうとしても、救えなくなるのだ。そこで結局彼女は、自身の性的欲望を誘発する凌吉士から離れることを選ぶ。「汽車に乗って南下し知る人もないところでわが生命の残余を浪費する」(80頁)と決めた彼女は「ひそかに生き、ひそかに死んで行く、ああ、かわいそうなソフィ！」(同前)と狂ったように笑い出す。欲望に目覚めた彼女は深い葛藤の末、一人で孤独を味わうことになる。彼女のようにセクシュアリティの選択に向けて必死に努力すること、苦悶している姿及び、中の苦悶を自分の手で書き綴ろうとすることは全て、特殊な年代にある女性の主体性の体現だと言えるのではないか。

## 5. 終わりに

この作品において、1920年代の知識人女性であるソフィは、性的欲望に覚醒している。ここまで見てきたように、彼女が一連の疎外を経験するのは、自身の肉体的欲望に目覚めてしまったからであると言える。この疎外の過程で、彼女はかたくなになろうとしたり、迷ったり、欲望を断とうとしたりする。その挙句、性的欲望を追求するだけでは本当の愛にたどりつけないことを彼女は思い知ることになる。彼女は心身一致の上での愛情を理想としてい

るため、欲望の主体としての自分をなかなか肯定できない。一方で、彼女は自我、また主体性を守るために苦しむことで、高い代価を払うことになる。当時の知識人女性たちのように、ソフィは主体性を求め、自身の欲望について意識し始める。しかし、結局のところそれを守るために、ソフィは自身を追放するしかない。このソフィの苦しみは、新旧の性道徳の間で揺れ動いていた 1920 年代当時、知識人女性たちが経験していたことに通じるものではないだろうか。

### 注

- 1 本稿ではエレヌ・シクスーの定義を使いたい。シクスーは、女性的なエクリチュールを創出はまず第一に、「自分を書くことで、自分の肉体に戻る」（シクスー『メデューサの笑い』松本伊瑛子ほか編訳、紀伊国屋書店、1993年、16頁）と述べている。自分自身の「身体に戻り、身体を独立した存在として自由に声を出させ」ことが、「身体（肉体）を書くこと」（63頁）である。また、欲望を語ること、思い出、寝言などを通して女性たちが自身の思いを述べていくことも、その「身体を書く」行為に属する。（同前）すなわち、「女性的なエクリチュール」は、女性が「自分の身体から自分の筆または自分のディスクールを通して、身体の器官を語り論じ、身体が本当に求めていることを書く」と定義できよう。但し、寿静心はシクスーの概念を使っていると明言してはいない。なお、『ソフィ女士の日記』のテキストは女性的エクリチュールの理論だけで論じきれない部分があるが、本稿では女性的エクリチュールの理論で分析できる側面を取り上げることにしたい。
- 2 寿静心『女性文学的の革命—中国当代女性主義文学研究』、中国社会科学出版社、2007年、41頁。
- 3 本稿では丁玲『丁玲文選—莎菲女士的日記』（人民文学出版社、2004年）所収の版を参照した。邦訳は、既訳岡崎俊夫訳（岩波書店、1956年）を参考にした拙訳である。
- 4 女性の主体意識、また性に関して女性が主体とするセクシュアリティ観念など。（徐仲佳『性愛問題—1920年代中国小説的現代性闡釋』、社会科学文献出版社、2005年、279頁参照）。本稿では、女性が意志を持ち、性の抑圧から解放されようとする女性の意識という意味を含んでいる。
- 5 馮夏熊「丁玲的再現」、『丁玲研究資料』、天津人民出版社、1982年。
- 6 徐仲佳、前掲、285頁。
- 7 中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年～史料にみる歩み』、青木書店、2004年、87頁。
- 8 茅盾「女作家丁玲」、『文芸月報』第2号、1933年7月15日。
- 9 中国女性史研究会編、前掲、青木書店、2004年、87頁。
- 10 中国女性史研究会編、同上。
- 11 朱棟霖 丁帆 朱晓進主编『中国現代文学史:1917～1997 上册』、高等教育出版社、1999年、152頁。
- 12 サンガー夫人の「産児調節」理論（村田雄二郎『『婦女雑誌』から見る近代中

- 国女性』、研文出版、2005年）、与謝野晶子の「貞操論」（『新青年』4巻5号、1918年）、及び「貞操論争」（関係文献：1918.5『新青年』（4巻5期）周作人「貞操論」、1918.7『新青年』（5巻1期）胡適「貞操問題」、1918.8『新青年』（5巻2期）唐俟（魯迅の筆名）「我之節烈観」、1919.4『新青年』（6巻4期）周作人、胡適、藍志先「討論」）からもたらした性に関する様々な新たなセクシュアリティの観念である。
- 13 ジョゼフ・チルダース ゲーリ・ヘンツィ『現代文学・文化批評用語辞典』、松柏社、1998年、387頁。
  - 14 ジョゼフ・チルダース ゲーリ・ヘンツィ、同上、301頁。
  - 15 シモーヌ・ド・ボーヴォワール『決定版 第二の性 I 事実と神話』、井上たかこ 木村信子監訳、新潮社、1997年、11頁。
  - 16 劉伝霞『被建構的女性-中国現代文学社会性別研究』、斎魯書社、2007年、17頁。
  - 17 「「疎まれ者」とは、共同体から排除されてはいないが、疎外されている者を言う。同じ共同体の中で疎外されている存在を意味する。共同体の一員としては見なされているが、マジョリティとは異質な存在として位置づけられているものとして考えられる」。（須藤宏明『疎外論—日本近代文学に表れた疎外者の研究』、おうふう、2002年、314頁）。
  - 18 劉伝霞、前掲、17頁。
  - 19 ヴァージニア・ウルフ『私ひとりの部屋—女性と小説—』、松香堂、1984年、161～162頁。
  - 20 エレーヌ・シクスー『メデューサの笑い』、松本伊瑳子<ほか>編訳、紀伊国屋書店、1993年、16頁。
  - 21 エレーヌ・シクスー、同上、18頁。
  - 22 エレーヌ・シクスー、同上、63頁。
  - 23 エレーヌ・シクスー、同上、65頁。
  - 24 シクスーは「文学史を振り返っても同じです。すべてが男に付きまとう苦悩、すなわち万物の起源で（起源に）あろうとする欲望に、帰属します。つまり父に。哲学—文学（文学が意味を表現する以上、哲学に支配されるので）と男根中心主義の間には、内在的な関係があります。哲学は、女を失墜させることによって成立しました。男の秩序への女の従属は、この哲学が機能するうえで不可欠の条件のように思われます。男は、女にもはや依存しなくてすむので、女を、自分の欲望を刻む為の都合のよい心材、いつも処女であるような対象物にしました」。（エレーヌ・シクスー、同上、101頁）。
  - 25 エレーヌ・シクスー、同上、87頁。
  - 26 エレーヌ・シクスー、同上。
  - 27 E、ショウォールター『女性自身の文学』、川本静子<ほか>共訳、みすず書房、1993年、69頁。
  - 28 徐仲佳、前掲、239頁。
  - 29 徐仲佳、同上。
  - 30 寿静心、前掲、43頁。
  - 31 サンガー夫人の「産児調節」理論、また性教育と性知識の普及を推進した「性教育特集号」（『教育雑誌』、1923年8月）などである。
  - 32 最も注意に値するのは、「新性道德論争」である。「新性道德とはなにか」（章錫琛『婦女雑誌』第11巻第1号、1925年1月）という文で、性関係自体は私

的なものだと指摘している。また「性道德の科学的基準」（周建人『婦女雑誌』第11巻第1号、1925年1月）では、様々な性道德の観念に言及し、更に性関係においては男女平等だと指摘している。

- 33 村田雄二郎、前掲、161頁参照。
- 34 姚文元「莎菲女士们的自由王国」、『收穫』第2期、1958年。
- 35 董炳月「男権と丁玲初期小説創作」、『中国研究月報』田畑佐和子訳、中国研究所、1960年。
- 36 同注15。
- 37 同上。
- 38 徐仲佳、前掲、1頁参照。
- 39 中国が近代化の中で“人としての発見”と“女性としての発見”を経験した。（周作人「人的文学」、『新青年』、第五巻第六号、1918年）。
- 40 舒芜「女性的発見—周作人的人的婦女論」『回帰五四』、辽宁教育出版社、1999年、435頁。
- 41 常彬『中国女性文学話語流変 1898—1949』、人民出版社、2007年、185頁。
- 42 映画の理論家ローラ・マルヴィは「男のまなざし」という概念のもと、主流映画が観客のものの見方を構築する過程について議論を行った。女性は、対象化され、見世物にされ、映画の中の男性によって見られ、また同じように観客一人一人によって見られるのである（マルヴィ「視覚的快樂と物語映画」『イマージ』、斎藤綾子訳、青土社、1992年）。
- 43 寿静心、前掲、108頁参照。
- 44 常彬、前掲、329-330頁参照。
- 45 「疎外」という概念について様々な見解がある。ヘーゲルにとって「疎外」の根本的な意味は、「自分より大きく敵対的な社会のなかで自分が隔離され異なった存在であると感じること」である。（ヘーゲル『精神現象学』（上巻）金子武蔵訳、岩波書店、1952年）。ルソーは「自己疎外」という言葉を用いた。（ルソー『エミール』（上巻）、今野一雄訳、岩波書店、1962年）。本稿ではこの「疎外」という言葉が社会的な問題と同時に心理的な問題を意味している点に注目する。そのため、本稿では「社会的要素」と「心理的要素」のかかわりから「疎外」を捉えるフロイトの定義を参照する。フロイトは、「疎外の原因は、自身の快樂を追究したいという願望と、社会に強制される抑圧の間の葛藤において生じる」という。（W・カリー『疎外の構図：安部公房・ベケット・カフカの小説』、安西徹雄訳、新潮社、1975年、34頁）。また、1920年代の時代背景のもとで、知識人女性であるヒロインの「疎外」は性的欲望と理性の間の葛藤だとも考えられる。
- 46 寿静心、前掲、45頁。
- 47 本稿では女性のあるべき姿として押し付けられる性役割を女性たちに内面化させる男権社会の圧力を指す。
- 48 徐仲佳、前掲、239頁。
- 49 瑟盧「産児限制与中国」、『婦女雑誌』8巻6号、1922年、10～14頁。
- 50 劉伝霞、前掲、290頁。
- 51 自我は、外界の環境から影響を受ける上で、イドと超自我の間の葛藤を調節し、人間が主体として行為していくための意識を指す。（チルダース+ヘンツィ、前掲、317頁、「快感原則」を参照した）。
- 52 徐仲佳、前掲、236頁。



- 53 「現代性道德の主体性原則により、現代性道德には道德と歴史、主観と客観、欲望（主に性的欲望）と理性との緊張と衝突が終始存在している」。徐仲佳、同上、3頁。
- 54 ベアトリス・ディディエ『日記論』、西川長夫・後平隆共訳、松籟社、1987年、148頁。
- 55 次のような先行研究がある。「但莎菲就是莎菲，欲望的沉迷不会淹没她桀骜的自我，当发现美男子原来是金玉其外败絮其中，毫不犹豫地将他“一脚踢开”扬长而去，丝毫没有传统女性的柔弱，依附，奴从，禁欲，怨泣等礼规和礼教意识束缚」。（常彬、前掲、190～95頁）。
- 56 寿静心、前掲、43頁。
- 57 寿静心、同上。